



吉備邪馬台国東遷説と吉備線 LRT 埴輪の起源・特殊器台と桃祭祀

■ 邪馬台国といえば「魏志倭人伝」に出てくる弥生時代に倭国の首都のあったところ。江戸時代から邪馬台国がどこにあったか、延々300年ほど議論されてきた。九州の吉野ヶ里遺跡が発掘された一時期、邪馬台国九州説が勢いを得たが、2009年奈良の纏向遺跡で宮殿のような柱跡が出てきて邪馬台国大和説が強くなってきた。

■ さらに2010年には東西に一直線に並ぶ4棟の建物の最大のD棟南側の土坑から桃核2765個が発見され、2011年10月26日放送のNHK「歴史秘話ヒストリア」の「女王さま振り向いて!」では、桃核について、「いまだかつて日本の遺跡から発掘されたことのない、異様なほどの数」で、「卑弥呼は大陸から桃の儀式を受け継ぎ、不老長寿や平和を祈ることで、民をまとめていたのかも」と、卑弥呼は大和にいて、邪馬台国は大和朝廷だとの邪馬台国大和説の証拠とされた。



■ ところが岡山市と倉敷市の間にある上東遺跡(RSKバラ園前道路)の波止場状遺構から9608個の桃核が1998年に出土しており、岡山市の津島遺跡(運動公園)でも2415個、百間川遺跡でも400個ほどが3か所など、岡山では当たり前のように桃核は出土していたのである。最近、上東遺跡を発掘した岡山県古代吉備文化財センターのホームページでは、「岡山は今も昔もモモの国」としてようやく紹介されたが、考古学の世界でもマスコミでも、この事実はまだ全く知られていない。それでいいのだろうか。

■ 1976年から開始された倉敷市の楯築遺跡(弥生時代最大の墳丘墓・全長約80m)の発掘によって、巨大な墳丘を築き、葬儀用に埴輪を並べるなど古墳時代の多くの要素がここからはじまったことがわかってきた。楯築遺跡を発掘した岡大・近藤義郎さんには厳しいこだわりがあって、楯築を古墳でなく弥生墳丘墓と名付けたのだが、「古墳も埴輪も吉備が起源」と言ってもいいのではないかと思う。

■ 1972年の新幹線岡山開業時に吉備路や倉敷美観地区は観光的に大きく注目されたが、

NPO 法人公共の交通ラクダ(RACDA)

事務局 〒700-0823 岡山市北区丸の内 1-1-15 禁酒会館 3F TEL&FAX 086-232-5502

E-mail: info@racda-okayama.org

URL: http://www.racda-okayama.org

RACDA

検索



この時期に津島遺跡の武道館建設問題と吉備路のこうもり塚修復問題で、考古学会と岡山県・財界が厳しく対立したことがあった。古墳などの遺跡は確かに重要な観光資源ではあるが、それをどの様に生かしていくかについては色々な意見がある。この時期の対立が根底にあって、岡山では古墳の観光活用はほぼなされなかったと言っている。

■その後の長い研究史の中で、楯築遺跡から出た「立坂型特殊器台」は画期的であり、別に楯築遺跡に存在した弧帯石に描かれた「弧帯文」が次の向木見型特殊器台、宮山型特殊器台の文様として定着し、都月形特殊器台型埴輪に受け継がれたことがわかってきた。宮山型と都月型は、ほとんど吉備と大和でしか出土せず、大和でもごく初期の巨大前方後円墳のみで出土することがわかっている。考古学者の間でも密かに吉備邪馬台国説は語られていたようだが、私は奈良にある箸墓古墳は吉備邪馬台国と大和狗奴国の統合のモニュメントであるとの「吉備邪馬台国東遷説」を唱えた。

■邪馬台国は吉備にあって、女王・卑弥呼は岡山にいた。卑弥呼の後継者の臺與(とよ)は桃を使った祭祀と特殊器台・弧帯文を持って大和に東遷した。纏向の宮殿跡は臺與の宮殿であり、そこで桃を使った祭祀を継続したのである。日本書紀では吉備津彦の姉とされ、日本最初の巨大前方後円墳・箸墓古墳に葬られたと書かれる倭迹々日百襲姫命(やまとととびももそひめのみこと)は臺與なのではないか。なぜならその名前には、「もも」がちゃんと付いているのではないか。倉敷・上東遺跡や奈良・纏向遺跡から出た桃核祭祀は、卑弥呼から臺與が継承したとすれば、モモソヒメは桃(百)の祭祀を世襲(襲)したという意味じゃないのか。

■今まで「岡山は桃太郎」という根拠はイマイチ弱く、我々も自信を持って桃太郎を打ち出せてこなかったように思う。一方、JR西日本では昨年からは吉備線の愛称を「桃太郎線」として打ち出し、新幹線の車内のアナウンスもいち早く変更されている。吉備線の名称はそう簡単に変更できないだろうから、今後は両



方の名称をどんどん宣伝していきたいものである。我々郷土の財産である吉備路を地元の我々がきちんと顕彰していく中で、岡山市や総社市が検討している吉備線LRT化の実現を図る必要がある。我々が光っていてそれを皆が見に来る、これが観光だ。

■RACDAメンバーの多くが参加する「楯築サロン」では、いま楯築型特殊器台の再現に取り組んでいる。3年前に備前焼作家たちの協力のもと実現した「吉備特殊器台復刻プロジェクト」を継承し、地元で根付かせる作業が始まった。古代吉備の素晴らしいデザイン、特殊器台や弧帯文、分銅型土製品などをもっと多くの人々に知ってもらいたいものだ。